

地域医療の現場から ● 92

循環器内科は心臓や血管の病気を主に診療する内科です。様々な病気がありますが、今回は狭心症の診断に用いられる冠動脈CTについて、お話したいと思います。

心臓には、心筋に酸素やエネルギーを供給する冠動脈という血管があります。狭心症とは冠動脈が動脈硬化で細くなったことにより、心筋の血流不足が生じて胸の痛みなどが出現する病気です。狭心症の確定診断をするには、画像として細くなった冠動脈を確認する必要があります。以前は心臓カテーテル検査を行わなければ血管の状態がわかりませんでした。近年になり

CTで診断することが可能になりました。心臓カテーテル検査は局所麻酔で行えますが、通常入院が必要で、カテーテルと呼ばれる管を心臓に入れるため合併症が起きることがあります。一方、冠動脈CT外来で造影剤を注射しながら撮影を

ができます。

ここまでみると、いいことづくめの検査ですが、弱点もあります。心臓は常に拍動している臓器です。動いているものを撮影する場合ブレが生じます。そのブレをできるだけ少なくするため、

像になってしまい、診断をすることができません。

また、動脈硬化は主にコレステロール成分で構成されますが、石灰化成分が多い病変もあります。そのような時も画像に乱れが生じ、診断が困難となります。

心臓検査CTで診断

CT検査の限界ということになります。狭心症を否定することができないので、カテーテル検査を含めたほかの検査を追加することとなります。

行うので、経済的にも、身体的にも負担の小さい検査であるといえます。様々な研究で陰性的中率が高い検査であることが分かっており、CTで異常がなければ、ほぼ狭心症の心配はないと判断すること

検査中に呼吸を含めた体の動きを止め、心拍数を遅くする必要があります。心拍数は自分でコントロールすることはできませんので、薬剤を使用します。薬剤を使用して、心拍数が早かったり、不整脈があったり、体が動いてしまうとブレた画

CTの進歩により私たちもより簡便に、短時間で病気を診断することができるようになりました。今後も更なる進歩により、今よりも多くの人に有用な検査として広く普及していくのではと考えています。

セコムディック病院
循環器内科

木下 良子